

京都・柳馬場通竹屋町出土の柄鏡鑄型資料

久世 康博

1. はじめに

京都市内の小学生人口の減少に伴って、同市教委は小学校の統合・再編計画を立案し、それに基づいて新しく学校を建設することとなった。そのため旧富有小学校の跡地を「御所南小学校」として建設するための事前調査を1993年に行った。筆者も途中からではあるが、発掘調査に参加することとなった。

遺構の残存状態は、平安時代以前から近現代に至るまでの遺構が重複しており、筆者が担当した調査区でも平安京左京の通有の複雑な状況であった。その中でも特に注目すべきものとして鏡鑄型の出土がある。出土した鏡鑄型は一つの遺構からまとまって出土しており、量も多いため資料的価値は高いと考える。そこで小稿では出土遺物の紹介を中心として、併せて他の資料との比較検討を試みたいと思うものである。

2. 鏡鑄型出土地の概要

調査地は京都市中京区柳馬場通竹屋町下る五町目に所在する（図1）。平安京では左京二条四坊十一町に想定されており、北は大炊御門大路、南は冷泉小路、東は富小路、西は万里小路に囲まれた宅地の北半に当たる。

調査の対象が約3100㎡と広い面積であることや、校舎の取り壊しと並行して調査を進めて行く必要があったため、都合3つの地区に分けて調査を行った。このうち第3調査区は旧校舎の基礎のため、調査対象地の半分近くが攪乱を受けていた。そのため攪乱を受けた部分では、井戸や大土坑の一部が残存しているだけか若しくは全く破壊を受けた状態であった。

調査の結果、弥生時代から江戸時代に至るまでの遺構群を多数確認することが出来た（図2）。

平安時代以前の遺構は、調査地の北西から南東にかけて流れる弥生時代後期から庄内式併行期と古墳時代後期から飛鳥時代の流路を確認した。

平安時代前・中期の遺構は、大炊御門大路路面と南側溝、掘立柱列、井戸、土器溜り、土坑などがある。これらの遺構の分布状況から、いくつかのブロックに細分された土地利用の在り方の推定が可能である。また大炊御門大路路面

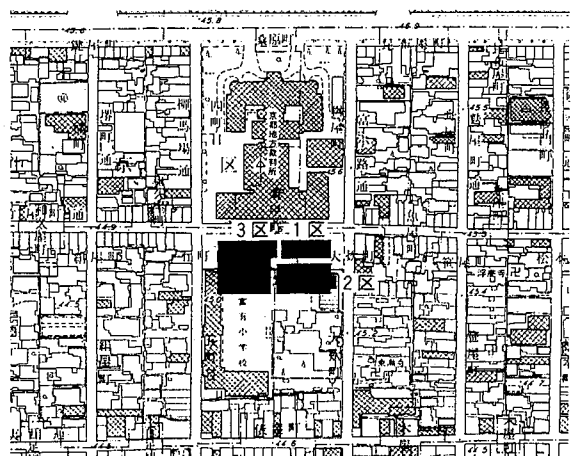


図1 調査位置図（1：5,000）

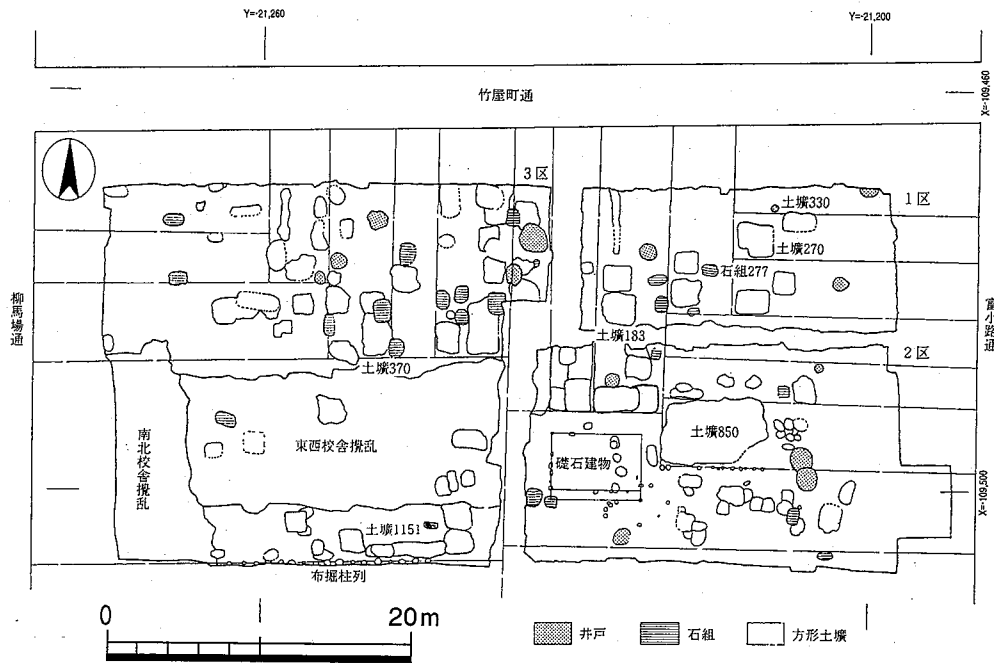


図2 桃山時代から江戸時代前期遺構平面図 (参考文献 (11) より)

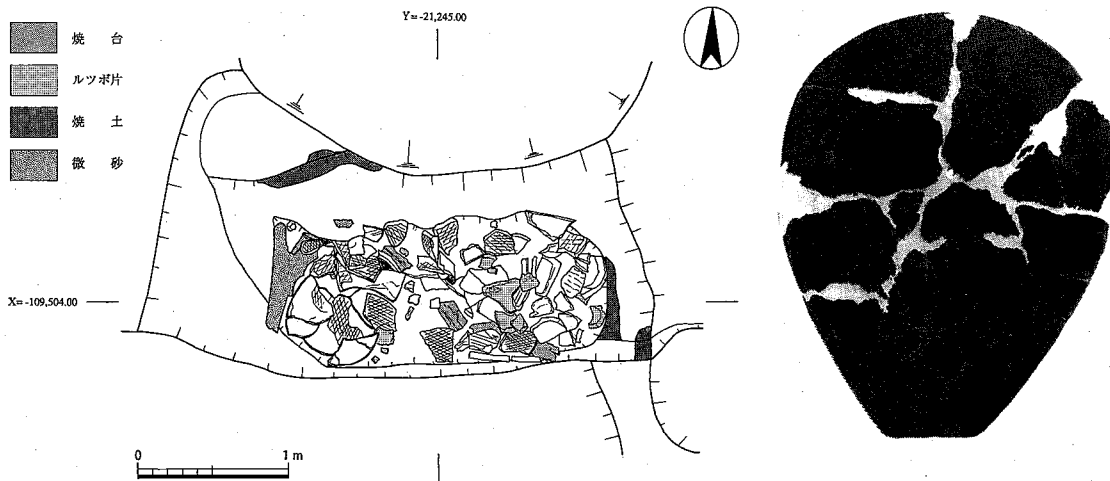


図3 土坑1151平面図と出土遺物

内では祭祀（地鎮か？）に関連する遺構の検出もある。

平安後期から鎌倉時代の遺構は、大炊御門大路路面と南側溝、掘立柱列、井戸、土器溜り、土坑などがある。大炊御門大路路面が徐々に侵食されていく様子が認められる。井戸も石組のものが検出されており、その規模も大型になってきている。

室町時代になると、柱穴や土坑の分布が高密度になり、断面がV字形をした溝・掘の検出もあり、土地の利用状況の様子がよく分かる。

桃山から江戸時代前半の主な遺構は、調査区の東・北半部では町屋の区画を確認することが出来、8軒分を確認することが出来た。1軒の宅地内には井戸・石室・土坑が整然と形成されている様子が見えてくる。

同じく第3調査区の南半部は攪乱のため町屋の区画については確認することは出来なかった。しかし調査区の南端で東西方向の布掘柱列を検出している。これは幅0.6～0.7m、深さ0.3～0.5mの掘形を測り、長さ27mにわたって検出した。掘形の中に更に柱穴を穿ち、底部には礎石を据えている。柱間は1.1～1.3m間隔で、作り替え若しくは修復が行われていたことが確認できた。検討の結果、この遺構は寛永14年（1637）の洛中絵図に見られる金森出雲守の敷地の北限と一致することが判明した。

土坑も多数検出されている。このうち第3調査区の南東隅、布掘柱列の北3mの地点で、長辺1.3m、短辺0.6m、深さ0.4mを測る長方形の土坑1151（図3）から、鑄造に関連する遺物が大量に出土している。検出遺構の壁の一部には高熱を受けた痕跡があり、操業していたかと思われる。同程度の規模・形状を示す遺構はあと1～2基認められたが、出土遺物の量は少なく検出遺構の状況からも鑄造関連遺構と断定するまでには至らなかった。

江戸時代後半の主な遺構は、前半とほぼ同様の様相を示している。ただ検出された石室の中には埴塼を転用して「室」とした遺構が2基確認出来ている。井戸は町屋を単位として掘り込まれていたようである。土蔵も2基検出した。

先の布掘柱列の上層で石垣を検出している。これは最大3段残存していた。布掘柱列と同様、大名屋敷と町屋の境界のための施設と考えられる。

出土した遺物は多岐にわたり、縄文時代から江戸時代にかけてのものがある。江戸時代の遺物は、今回紹介する鑄造関連資料を除くと、土器では土師器・（国産、輸入）陶器・磁器・塩壺などがある。輸入陶器については東南アジア系の陶器も確認されている。石製品は、硯・石臼・砥石・火打石などがある。金属製品は、銭貨・釘・煙管雁首・飾金具など多種にわたる。他に骨角製品やガラス製品の出土も認められた。

3. 出土した鑄造関連資料

ここでは土坑1151から出土した、鑄造に関連する遺物について紹介することとする。

土坑1151から出土した遺物は、フイゴ羽口・焼台・鏡鑄型といった鑄造に関する遺物のほかに土師器片・陶器片・釘が少量出土している。共伴する土師器片・陶器片の特徴から、検出した遺構は18世紀前後と考えられる。

〔鑄造関連遺物〕

フイゴ羽口（写真1） 出土した遺物の数量は多くない。どれも外部先端に銅滓が厚く付着しており、使い込んでいたようである。ほとんどが破片であるが、もっとも残存状態の良いものを例にとると、口径8.0（内径4.2）cm前後、長さ16.2cm以上である。吹き口は一部融けており、外面端部から4cm前後は溶銅が付着している。なを内面には銅付着の痕跡は認められない。

埴塼 埴塼と考えられる破片もあるが、復元するまでには至

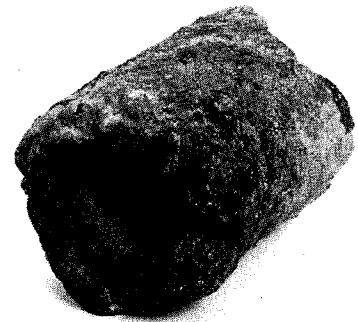


写真1 フイゴ羽口

らなかった。出土した遺物の内側には溶銅がこびり付いていた。他の遺構から出土した同種の遺物を参考にする、口径7.5～8 cm前後、最大胴径20cm前後、長さ30cm程度でズン胴の砲弾型かと思われる。器壁は2.5～3 cmを測り、胴部には直径3 cm前後の孔が穿たれている。先に紹介したように、埴塼を利用した「室」のほかに井戸枠に転用された様子（写真2）も認められた。

焼台（写真3） 三角柱の形状を示している。うち完形品として復元できた遺物は、一辺7 cm、長さは22.5cmを測る。高熱を受けたためか、灰白色の色調を呈しており、胎土も堅緻であるが非常にもろくなっている。これらには溶銅の付着も認められないところから、製作した鋳型の元型を乾燥させる台として用いられたものであろう。何らかの施設の中で焼いたものと考えられる。あるいは土坑1151がそうではなかったのかとも考えられる。

屏風（写真4） 銅を溶かす際に使われる道具のひとつである。フイゴ羽口とともに組み合わせて用いている。全体を復元できるほどのものはなかったが、平瓦状の土製品で若干カーブを持っている。写真の遺物は縦が16.5cm、厚さは2.5cmを測る。内面及び端部には銅滓が付着し、外面は上下6 cm程度の幅で黒く変色している。他の類例も同様の形態を示していることが観察の結果分かった。

トリベ（写真5） 土坑1151からの出土は認められない。しかし、近くの他の遺構から完形品が出土している。それを参考にする、形状は半球状で肉厚の底部である。大きさは口径5.6cm、高さ2.7cm、器厚0.6cmであり、内部には銅滓が付着している。

他にも溶銅が付着している遺物や、高温にさらされたかと思われる土製品が幾つか認められる。筆者の認識不足によるものが多いため、よく分からないものが多々あった。そのため、それぞれについては、将来的に刊行されるであろう正報告書に委ねることとする。

〔鏡鋳型〕（図4）

出土遺物の接合を行ったところ、復元が可能なものは9個体（観察表を参照）、全容を復元するまでには至らないが別個体の

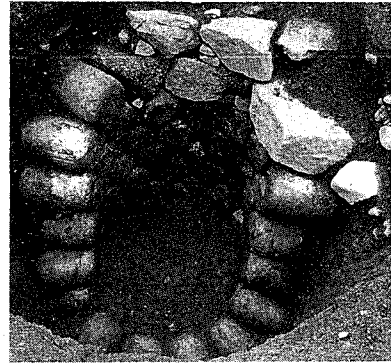


写真2 埴塼を転用した井戸

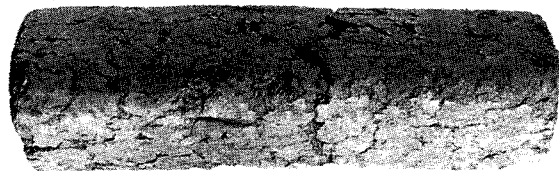


写真3 焼台



写真4 屏風片



写真5 トリベ

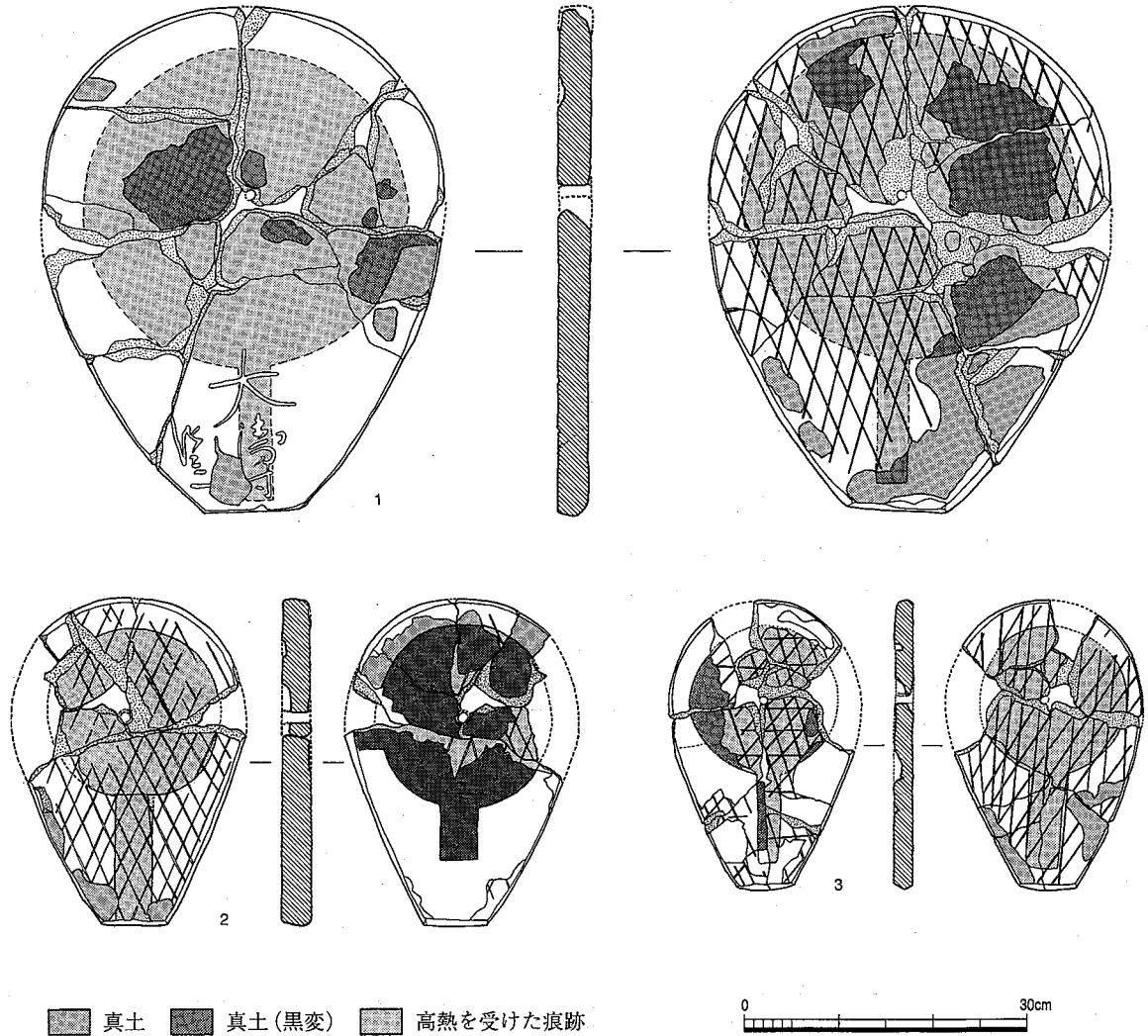


図4 3区土坑1151出土鏡鑄型実測図

鏡鑄型として認識できるものは17個体以上、計26個体分以上を確認することが出来た。

形状 これらは円形と台形を組み合わせた、馬蹄形の形状を示している。また何れも円形の部分には、径5mm程度の小孔を穿っているのが特徴的である。

鑄型の大きさは、最小のもので長軸31cm、短軸20.8cm、厚さ2.0cm、最大のもので長軸53.5cm、短軸42.0cm、厚さ3.3cmを測る。鑄型は粘土にスサを混入して成型し、それにヘラ状の道具で斜めに格子目を施し、さらに真土(まね)を塗り付けて仕上げている。なかには出来上がった土型の両面だけではなく側面までも、ヘラなどで丁寧に仕上げている様子があるものも認められる。

熱を受けて変色した部分から推定すると、そのほとんどがいわゆる柄鏡を製造するための鑄型であったことが判明した。小さいもので面径15.3cm、総長25.0cm、大きいものは面径33.6cm、総長47.4cmであった。大きい方は数多くの伝世品を通じて、最大級に属する鏡を製作していたことになる。同じく熱を受けた痕跡から、溶銅を流し込む湯口は長軸に対して鏡面の横に在った形跡を示している。各々の鑄型は両面が変色しているため、何枚かを重ね合わせて一度の鑄込みで数枚の鏡を製作していたようである。

このうち唯一点だけであるが、長辺15.0cm、短辺11.0cmの長方形の変色痕のある鑄型もあった。

土型はやはり馬蹄形を呈している。これは片面だけに変色した痕跡が認められる。方形の懐中用手鏡を製作していたものと思われる。

そして復元できる大きさから判断して、7種類の柄鏡と1種の方形鏡の鋳型が確認できた。

ほかに鋳型を観察して特に目立つのは格子目である。定規を当ててヘラで線を引いており、その幅は1mm前後、間隔は1.6~2.2cmである。

格子目はほとんどが斜めに刻されており、明瞭

でその前後関係が分かるものもある。判明しているものでは、先ず左上から右下へ次いで右上から左下方向に向かって引いている例が多いことが理解できる。これは真土の剥落をさけるための措置であろう。

真土は完全に剥落しているものもあるが、二重に塗られていたものも認められた。

紋様(写真6) 鏡が鋳上がった段階で、型から離すときに鏡背の紋様鋳型は完全に壊れたようである。そのため同時に出土した紋様鋳型の最も大きい破片は、一辺が1cm程度で全体の様子は不明である。判別し得る紋様は、円・亀甲紋・卍・草葉などがある。地模様は“細粒砂目地”などが認められる。また、これらの模様を見るかぎりではシャープな線を示しており、いわゆる“踏み返し”による製作ではないように思われる。

表裏 接合した鋳型をよく見ると、片面ごとに真土の残存状況が異なっていることに気がつく。すなわち、真土がきれいに残存している面と、土型に施した格子目までが表れている面とがあることである。これは鏡背の複雑な紋様のために、銅が付着する表面積が大きくなって剥がれにくくなり、その結果鋳放ちの段階でほぼ完全に壊れてしまった。そのために斯様な形態で残存したものと考えられる。

つまり真土の残存状況によって、鏡面・鏡背を推定することができるのではないかと考えてみた。こうした視点で遺物を検討すると、大方は表裏にそれぞれ鏡面・鏡背の痕跡として認められる。一方で片面に全くその痕跡が認められないものもある。これは鏡を鋳込むときに重ねた端部に該当するものもあると考えている。

割れ方 ある程度接合できた鋳型の割れ方を検討してみると、まず「鳥目(円形部中央の穴)」を中心として横一文字に割れているのが共通である。次いで「鳥目」より上部の割れが共通しており、更に柄部も半裁されているのが認められる。この事実は、鋳放ちの段階で面積が広く力学的に最も負荷がかかる部分であったことや、高熱を受けて最も脆弱化した部分から割れていった結果、でもあったと理解できるものである。湯口もその影響を受けており、破損している確率が高く、その存在を判定できる例は可能性があるものも含めて8点である。

鳥目 先にも少し触れておいたが、円形部のほぼ中心部に小穴を穿っているのは、全ての鋳型に共通する現象である。この孔は土型を成形した後、鏡面を決定するためのものであると説かれ

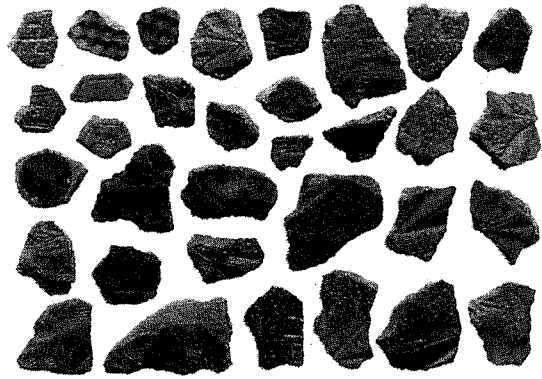


写真6 鋳型紋様



図5 ヘラ書文字拓影 (S=1/2)

ていた。実測の結果、鏡面の中心とは若干ずれており、しかもそれは両面ともにバラバラであることが判明した。

ヘラ書き文字 鏡鑄型にはヘラ状の道具で文字を描いた痕跡があるものもあった。図5-1、2（観察表-1、12）は土坑1151からのもので、3・4は近隣の他の土坑からの出土である。文字の位置は鏡を鑄込む面に書き込むことが多いが、土型の側面に書いている例もある（図5-2、4）。

1は、復元できたなかで最も大きい鑄型の片面に、文字を書いている事が判明した。2行にわたって「大湊付／左兵へ」と読める。1行目最後の文字は真土に被われており、接合・復元の最終段階で剥がしたところ斯様な文字を認めることが出来た。湊は鑄の誤りか、あるいは衛・勝、2行目は「左三」とも読めそうである。1行目は「大」のランクをもつ鏡を鑄付けるという意味であろうか。2行目は何れにしても人名と関係があるようだ。

2は、土型の最下部近くの側面に彫り込まれており、「菊田美作」と読める。“美”は美の異体

番号	全長	全幅	厚さ	推定長	推定径	柄幅	湯口	製作面	土型復元	その他
1-a	53.5	42.0	3.3	47.4	33.6	3.5	有	鏡面	可	ヘラ書き文字有り(本文参照)
1-b				47.6	34.7	3.3	有	鏡背		
2-a	35	25	2.9	25.3	19.7	4.1	?	鏡面	可	柄が非常に短い 真土の剥落は激しいが、推定可能
2-b				31.5	19	3.9	?	鏡背		
3-a	30.9	20.8	3	25	15.3	2.3	有	鏡面?	可	横方向の格子目も有り 真土の剥落は激しいが、推定可能
3-b				25.8	15.6	3.8	?	鏡背		
4-a	(17.5)	24	2.5	?	?	?	?	不明	鏡面 部可	鳥目は2孔、真土は剥落 黒変あるが面径不明
4-b				?	?	?	?	不明		
5-a	(19.5)	16	3	15(長辺)	11(短辺)	—	?	鏡背	可	長方形鏡 鏡の痕跡は不明
5-b				—	—	—	—			
6-a	24	16	2.5	?	24.6	?	?	鏡面	可	溶銅付着 溶銅付着、縁部が残存か
6-b				?	?	?	有り?	鏡背		
7-a	40	32.5	3.4	37	29	3	?	鏡面	可	残存は比較的良好 黒変あるが面径不明
7-b				(26?)	?	?	有り?	鏡背		
8-a	34	26	2.8	?	?	?	有り?	不明	可	黒変は認められるが、推定は不能 同上
8-b				?	?	?	有り?	不明		
9-a	41	29.5	3.5	37.5	25.7	3.5	?	鏡面	可	型の側面が変色、残存は良好 真土は剥落するが、僅かに推定可能
9-b				37.5	27.5	?	有り?	鏡背		
10-a	35.5	25.5	4	31	21	3.5	?	鏡背	可	真土は厚いが、鏡面部は剥落 部分的に真土が厚い
10-b				?	22.3	?	?	鏡面		
11-a	23	(20.5)	3	?	15.5	?	無	鏡面	鏡面 部可	鏡面部の残存は明瞭 真土は剥落
11-b				?	?	?	?	鏡背		
12-a			3				?	不明		側面に「菊田美作」のヘラ書き 鏡面部の接合不能
12-b								?		
13-a	(32)	32.5	2.6	?	27.6	?	?	鏡面	鏡面 部可	高熱のためかなり痛んだ状態
13-b				?	28.5	?	?	鏡背		
14-a	(22)	24.5	3.1	?	21	?	?	鏡面	鏡面 部可	鏡縁部の真土は剥落 土型の周辺部に僅かに残存
14-b				?	(18.8?)	?	?	鏡背		
15-a	(17)	(30)	2.7	?	?	?	?	鏡面?	鏡面 部可	真土は剥落(土型はきれい) 真土は剥落
15-b				?	?	?	?	鏡背?		
16-a	(22.3)	34.4	3.4	?	29	?	?	鏡面	鏡面 部可	真土は剥落
16-b				?	?	?	?	不明		
17-a	(40.2)	(14.9)	3.5	?	30.6	?	?	不明	鏡面 部可	No1に対応するものか 鏡の痕跡は不明
17-b				—	—	—	—	—		

※数字の単位はcm

表1 鏡鑄型観察表

字である。この名は『京羽二重』などによれば、17世紀後半から18世紀初頭にかけて、その存在が認められる鏡師である。菊田美作が居住していたのは新町通二条上ル町で、調査地から直線距離で西南へ約0.8kmに位置していたことになる。

3は「美作」と読める。2と同様に「菊田美作」かと思われるが、書体は相当異なっており奔放な文字である。文字のある面には斜めの格子目が施されていないため、溶銅を鑄込む際に数枚を単位とした端部の鑄型に該当するかと想定できる。真土は全く認められなかった。断片であるため鏡面や全体の大きさその他についてはよく分からない。

4は小じんまりとした文字であり、判読し難いが「□佐」とも読める。おそらく鏡師の名前であろうが、末尾にこの文字がある鏡師は文献史料には現れていない。本例では底部の側面にもヘラ書きが認められた。土型自体が剥離しているためやはり判読し難いが、「左兵へ」あるいは「左三」ではないかと思われる。1の2行目の文字群と同様の意味を持ったものと理解している。やはり真土は全て剥がれており、全容についてもよく分からない。これは1と同じ系統の鏡師であるかもしれない。

4. 中京区坂東屋町（図6）出土の鏡鑄型

店舗増築に伴う発掘調査で京都文化博物館が行ったものである。調査地は平安京左京四条四

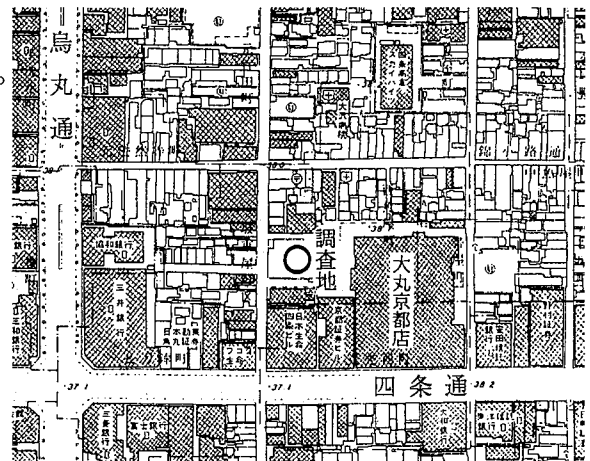


図6 調査位置図（1/5,000）

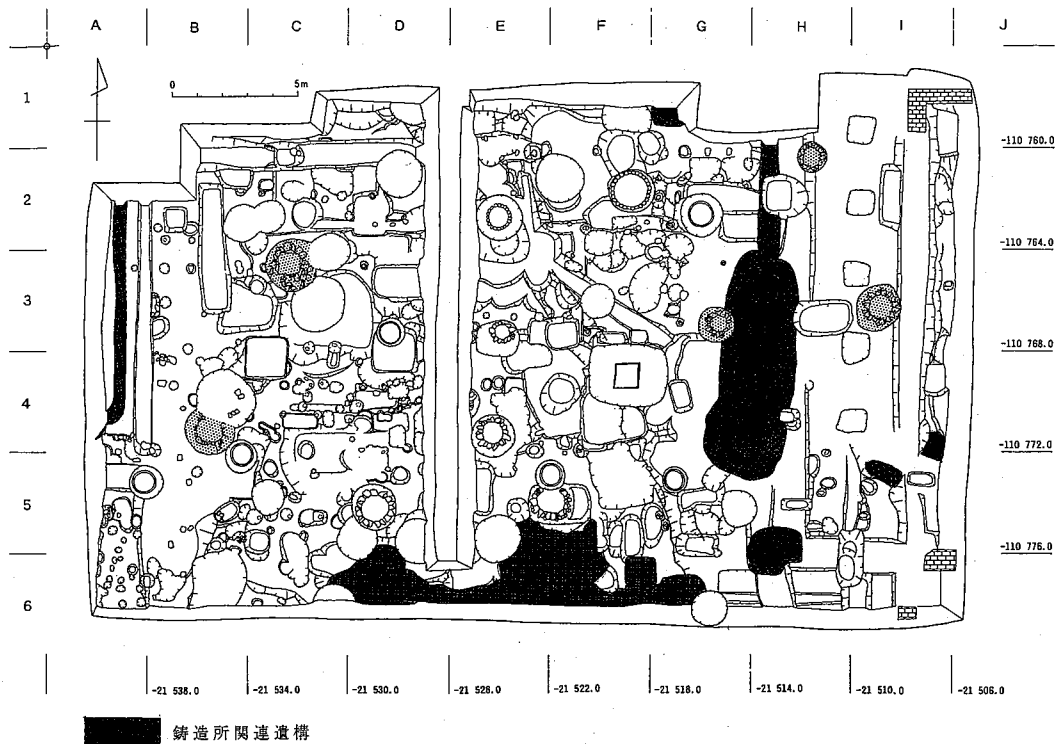


図7 検出遺構平面図（江戸時代前期）（参考文献（6）を改変）

坊四町に推定されている。調査の結果、弥生時代から江戸時代に至る遺構・遺物が検出されている。この調査地も先の柳馬場通竹屋町と同様に、各時代の遺構・遺物が複雑に重複していることが判明している。江戸時代の遺構は、井戸、溝、地下室等がある。主な遺物はこの時期通有の遺物が出土しており、特に目を引くものには焼塩壺、銅銭等がある。

本稿で主題としている鏡鑄型と鑄造関連遺構は、灰・炭片が多量に投棄された土坑、焼土・炉壁片の集中する部分、鏡鑄型などの鑄造関連遺物が出土する土坑があり、調査地のほぼ全域で検出されている（図7）。これらは何れも共伴する遺物から、江戸時代前期に属すると考えられる。そして調査地では、一般の日常生活の雑器類の出土が比較的少なく、鑄造に関連する遺物が調査地全体に拡がっているところから、全域が鑄造工房の敷地内であった可能性が想定されている。

出土した鑄造関連遺物は鏡鑄型が多く出土しており、そのほかにルツボ・ビヨウブ・フイゴ羽口などがある。

鏡鑄型（図8） その形状は「竹屋町」例と同様であるが、小型のものを主体としており若干細長くなっている。鏡鑄型の製作法は「竹屋町」例とほぼ同様であるが、湯口はよく分からないようである。整理の完了した鏡鑄型は3基の遺構から48点の出土が報告されている。その大きさは総長11.1～38.0cm前後、短径9.1～27.5cm前後、厚さ1.8～5.0cmを測る。なかには復元までには至らないが、短径44.0cm以上、厚さ6.5cmを測る例も報告されている。このうち、縁と二重圏線の一部が残り、鏡縁高も推定できる例もある。

報文ではこれらの遺物を、大きさなどの点から6種に分類している。1類は鏡面部の径が約10cm程度の鑄型である（図8-1）。柄を持たない小型円鏡を製作するためであったかと考えられている。2類は鏡面部の径は同程度であるが、柄鏡と推定できるもの（図8-2）。3類は鏡面部の径が約16.5cm程度の鑄型である。厚さは4cm前後ある（図8-3、4）。4類は鏡面部の径が約14.2～16.7cm程度の鑄型である。厚さは2.4～3.0cm前後ある（図8-5、6）。5類は鏡面部の径が約18～20cm程度、長さが30cm程度の鑄型である。厚さは2.8～3.2cmある（図8-7）。6類は鏡面部の径が約24.0～27.5cm程度、長さが35～38cm程度の鑄型である。厚さは3～4cmある（図8-8）。7類は全体の大きさが推定できないものを一括して指しており、6類より大型と推定されている（図8-9）。量的には、1類がもっとも多く、次いで5、6類になると思われるものが目立っている。

これらの鑄型を総合的に検討すると、鏡面部の径は3～8寸と順次変わるが、柄部分の長さは2～6類まであまり変動がない。逆に見ると、柄鏡の柄の長さは鏡面の大小にかかわらず、ほぼ一定であることが明かとなった。

坩堝（図8-10） 器壁が厚く半球形のボウル状を呈する土製品である。胎土には粗い砂粒や粉殻が多く混入されている。内面には鉍滓が付着しているためよく分からないが、内型を用いた成型のようである。これも大きさなどから3種に分類している。

ビヨウブ（図8-11） すべて破片であり、全体を復元できるものはなかった。その形態は「竹屋町」例と同様である。縦の長さだけは判明する品が数点あり、少なくとも2種類以上ある

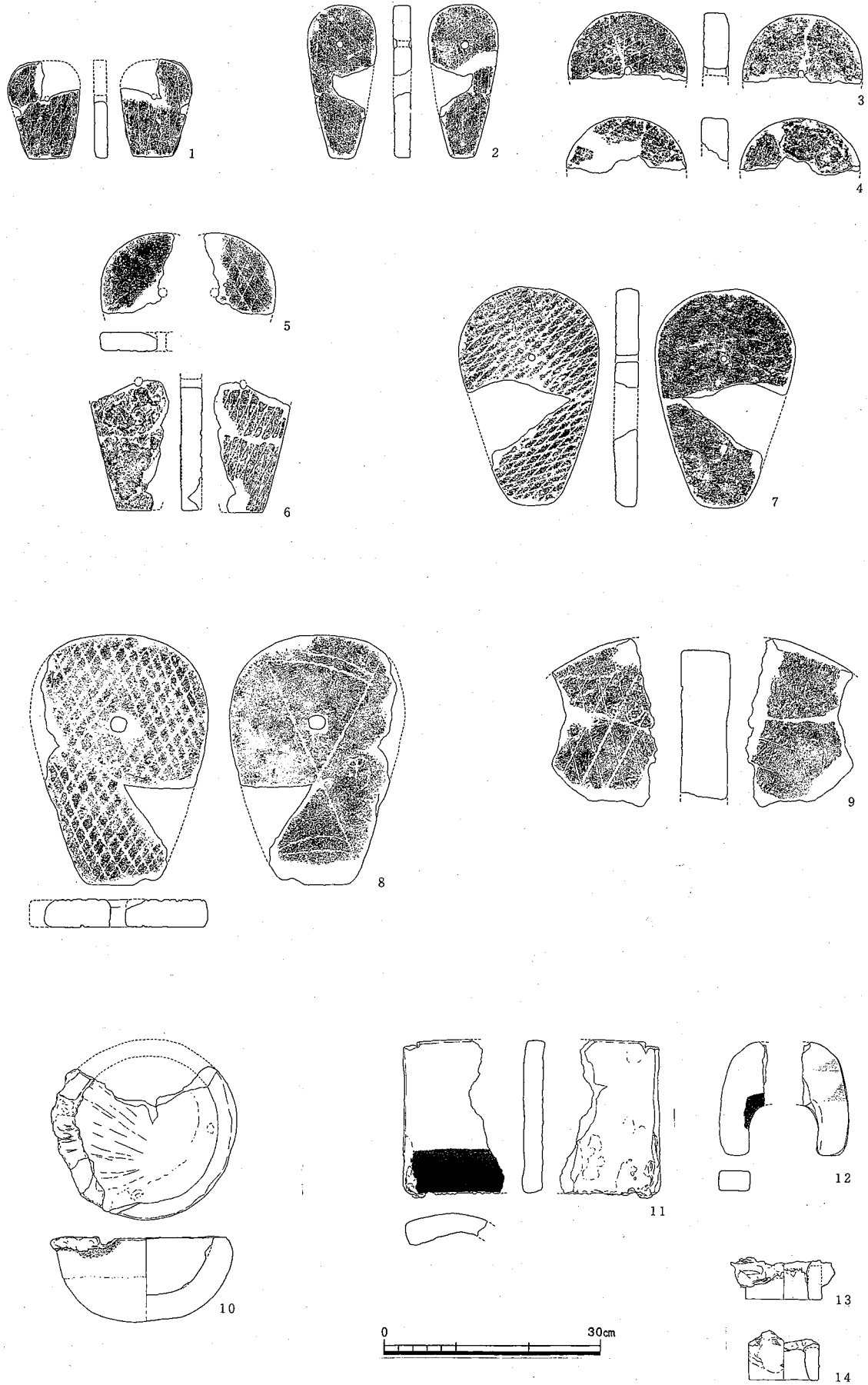


図8 坂東屋町出土の铸造関連遺物実測図（参考文献（6）を改変）

ようである。

馬のり(図8-12) 全体の形状は分からないが、おそらく逆U字形を呈するかと思われる。『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書』によれば羽口の上に置くという。溶解炉のピョウブの合わせ目の、差し込まれた羽口上部の隙間を塞ぐように用いられたものであろう。

羽口(図8-13、14) 短い円筒状を呈しており、口径は9.8~12.2cmを測る。なかには高熱を受けた痕跡がないものもあるが、大部分が端部の一方が融けたり鉍滓の飛沫のようなものが融着している。

5. 『青家文書』の鏡製作と出土遺物

青家は室町時代から明治初め頃まで続いた鏡師の家柄であった。伝えられた『青家文書』には鏡の製造過程や鏡の価格などが記載されており、江戸時代における鏡の生産流通の一端がうかがえる。『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書』(以下、『覚書』と略す)は、18世紀中頃に記録されたと見られる『青家文書』の第一帖に書かれており、鏡の製造過程やそれに関わる材料・道具などがよく分かる。そして今回出土した鑄造関連資料の時期とも似通っているため、文献史料としての『覚書』を取り上げてみることにする。ここではその原文(抄)と出土遺物・指図とを対比してみる。原文と指図は、香取秀真「御鏡仕用之控書 註記」を底本としており、一部筆者が補足したものである。

『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書(抄)』(I)、
下線は筆者による補足)

【準備する道具・材料】

一、吹子、内に狸の皮張る、但し風つよき故也 (以下略)

一、土道具、は口、是は鉄の筒先へ差す、形は竹之上へ土を巻きた、きしめる、とり粉はわら灰なり。

一、馬のり、は口の上に置物也、なりは如斯也 (右図一)。

一、屏風、ルツボ之上に向ひ合せに立る也、但し前にて、は口をはさむ也、なりは如斯 (右図二)、
屏風形は土にて、

一、ル壺、如斯 (右図三)、

一、ル壺ふた (右図四) 並吹屋は地銅高一と吹に何程と云ふ定り有故、六寸斗の鏡の柄を取りふた



一



二



三



四

に仕也。

…中略…

一、土は六原赤ジャリまじり吉、是なたにてこまかに切、むしろの上につみ、すりぬかを随分まぜ、水をかけ、右むしろをまき、随分足にてふみ付、夫より石臼に入、きねにて随分つく程よしとす、尤白き土にても赤く成迄つく也。土切ばん、丸太切はずし吉、土切なた常のなたにてよし。

…中略…

一、大はさみ 大バシ (右図九) トモルツボ引上るはし也。中はさみ 中バシ (右図十) トモ地銅さしくべる。又屏風はぐち馬のり等。小ばし (右図十一)、さはり又形よりあつき鏡とりなやみにいる箸なり。銅湯流し込時ルのしりかゝゑる、但し箸の柄にて。

おきかき (右図十二) 又火カキ是炭、地金くべる者也、但しつねのおきかきを知るべし。さはりた
たき (右図十三)、ふるきやすりにてよし。ル壺押さ
へ (右図十四)、古きせんにてよし。ルの口切 (右図十五)、古きたばこ包丁にてもよし。

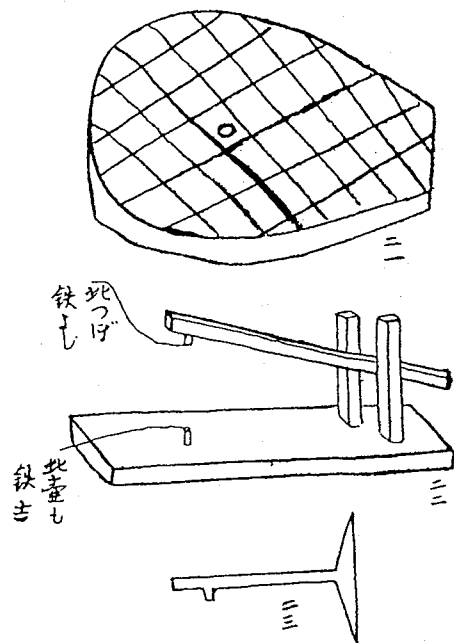
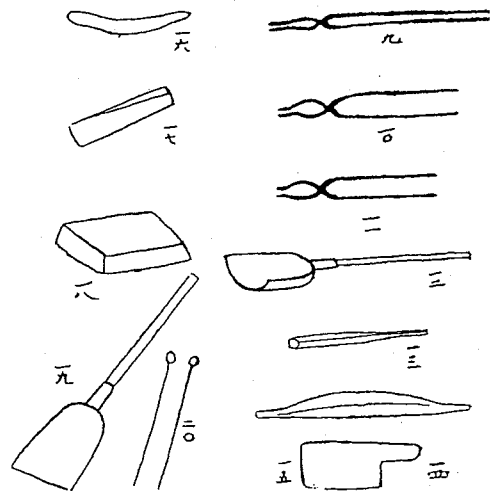
一、形ノ口切 (右図十六)、はがね入りのへら。大
たがね (右図十七)、鏡湯口を切あては鉄とこ (右図十八) 又はとたんにてもわり松くすべ、火かき (右図十九) 二本いる、随分あさき方よし、但カタヲコエ松ニテクスベユエンヲ取道具ナリ。火箸 (右図二十)、割松とりなやみ仕火箸、但シ常ノ火箸ノフトキ也。

吹家水ため、同杓、手桶、さゝら、しゆるほうき、但し柄は短かし。くは一丁、わらほうき。

石臼は大きくあまりふかきは悪しきねは餅つくきねにてよし、かきませる手木いる也。

…中略…

【鑄型】



一、鏡土形 (右圖二一)、土ノ仕法前書之通り、中なる筋はとくと打かため候跡にて三日錐にてふとく深く御付可被成 (*1) 候五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、一尺、一尺一寸、二尺二寸迄十五枚ツ、用意可仕候。

一、吹家道具は別に焼に不及候、然しルは湯わかす前にとくと焼べし。

一、鏡形はとくと干し付誠によく焼仕べし。

一、引形台 (右圖二二)、如斯。

一、引形ぶんまわし (右圖二三) かねにても竹にてても、八寸に七寸、六寸に五寸、尺に九寸、尺一に尺二寸、然し又印、本間印、粉印は不残ふん廻し大小、足ふと細の違有、引形ぶん廻しも違なり。又五寸より下は木の引ものを、かたにおして、是も又一寸のうらは一寸五分、二寸のうらは二寸五分、三寸のうらは三寸五分、四寸のうらは四寸五分、引もの屋へ、中よくみがき候様あつらゆる也、

一、引形ぶん廻しを掛け形を引 (右圖二四)

【真土】

一、下まねは晒屋あくの垂れかすに六原土かげんして合すなり、晒屋たれかす石臼に入随分々々きねにてつき、四斗樽に水を入、水飛するなり。

一、上まね (*2) 岡崎万願寺より出る也、是また水飛するなり。

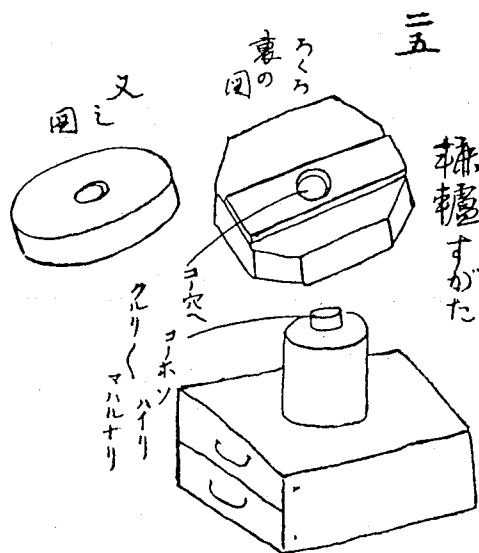
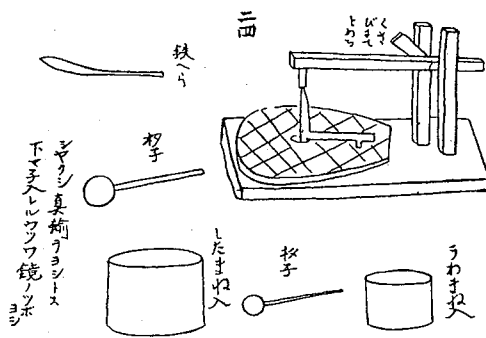
一、下まねは申すいのうにてこす也、上まねは随分目のこまかきすいのうにてこしてよし。

一、内にて仕候へば藁灰すりもみて、すいのうにてふるい、水にてねり煮る也。六原土水に入れ随分かきまぜ、うわにごり入る。但しすいのうにてとうす。

一、獅子谷土と云は、まね土の事也、黒谷中山の土まぜて是まね土と云也。乍然これやり候事我等は不覚候。又九条土を遣ふて見たきもの

*1 出土例は三日錐による格子目とは思われぬ。

*2 真土などに関しては以下のように多くの種類の土が使用されているが、分析によって特定することは可能であるか？



也。たれかすは鳥目三十文斗持行、しよもうして吉。

…中略…

【鑄型の整形】

一、轆轤の上になをし紋にても模様にても彫るなり。轆轤のすがた。

但し一尺二三寸マデは此上にて吉、一尺二三寸上は籠なり。

右わくにしたし竹等太きをしかけ其上に仏具屋焼土に六原土、九条土、わらすさを入、むら無之やうに仕、桧垣の筋を入、ほし付て火をつみ焼く也、さめて後、まね土かける。

…中略…

一、土形を轆轤にのせて撫板にてむらを直し、椿の木にてなで、又其上を椿葉にてつやを付。

模様絵、みの紙に書き、裏返し、形に置き、へらに水付け、随分行儀にしわを延し、小べらにて模様やはらかくきめ込み、紙を取のけ、いろいろへらにてへし彫にすべし。

又磨字の分はすきばりにすべし。

…中略…

一、柄付鏡は形も引くなり、丸腰高は形より上ぐる也、丸鏡は真中にいぼを引てよし、是紐通し也。

一、形出来候へば、形のしめりけをぬく(右図二六)これ焼く前に湯口を切りうらを付る也。

…中略…

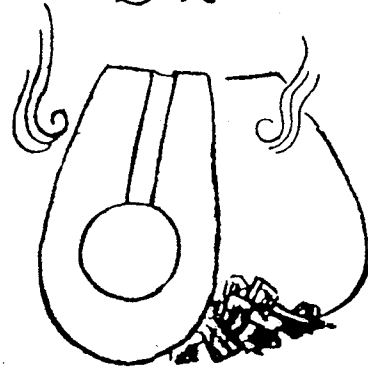
【鑄型の据付】 締板これ二枚いる也。

一、形を締板を直す図(右図二七~三十)、鏡何枚にてもよし、此内に山科土にて、重ねめをぬるなり、湯ぬけぬ用心なり。

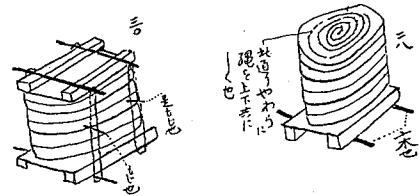
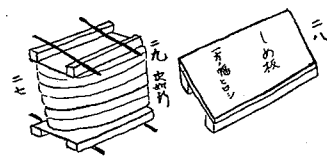
柄付は即チ柄ヲ鑄口トスルナリ(右図三一)、丸鏡並二角ナゾハ湯口ヲ切ル也、角ハヌメニテモヤウ彫ル、アシモ彫ルナリト心得ベシ。

一、もじ縄は米俵の立縄、水にぬらし遣ふ也、

此形と裏と
合せ其中へ炭火
移敷一夜焼く
二六



この指図のように露地で乾燥させるものであるのか？土坑1151内で乾燥させたかと思われる。



上図では2枚で1面を作成する単位となっているように見えるが、出土例では1枚の表裏を利用している。

久世 康博

又苧縄にても水にぬらしてよし、水にぬらせばつよく切れず候、ぬらさねば心元なし用心すべし。

…中略…

【鑄込・鑄放し】

一、鑄込みて其ま、形開くは悪敷、三時も四時もおそく明てよし、早く開けば土も落ちず鏡にくるい出る、仕立に難儀なり、錫入はなほ更くるい出れば直り不申候、ひらく事はおそき程吉也、おそく開けば土もおのづと落申候也。其上にて落かね候はゞ、きしり錐にてつくがよし、きしれば模様又は地はだに筋付見苦敷なる也。

一、土落候はば、さはりを取り裏払すべし、きしり錐あてる事無用、只白川砂にてはらうなり。砂は白川橋辺の砂宜敷、是は白川石切主の砂流れ来るゆへ、砂に角有により、よくおちる也。水すくなく、手水ちよこちよこと打、随分かまく様に払へばはやし、水多くつかへばおそしと心得べし。

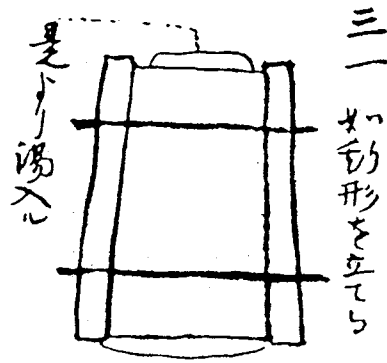
…中略…

【仕上げ】

一、夫より、けづりにかゝるなりせんの名、あらすき、中ぜん、かげとり、ならし、なでせん、耳かき。

かすり名、あらやすり、延やすり、玉やすり。めぎ上ケやすり。たがね。かな敷。但しふんどんふるきの吉鎌槌、ちぎ、大小きり品々、のこぎり、けづり板いろいろ、横すり板、えげすり板、つく木、鏡ともがね白玉、銅赤玉、さいづち。右玉仕様は、かねを随分湯にして高き所より滝のごとくほそく落す、下には、大はん切に水を入、其中に新しきくわほうきにて上より落る湯を請る也、水の中かき廻す人二人斗いる、以上五人掛るなり。

…中略…



出土例は鏡面側から鑄込んでいた様子がうかがわれる。

【定木、さしかね、竹金さし】

一、定ばん土 (右圖三二) は岡崎万願寺百姓、六原土まぜ是又水飛して板の上にあげ置、かたまり次第、定ばんのなりに造る也。定ばん三寸より一尺四五寸迄こしらへ置也、定ばんは、鏡より大きうても小さくても悪し、

一尺五寸より上は何尺よりぢやうばんと云て、五寸の定ばんにて鏡の表をすり廻すなり、其度々に定木をあて見る也。

一、炭磨、始め常慶寺石にて鏡足を磨、初紋の類有らば是をとき、耳を磨く。初表を対馬砥石にて小むら無之様に仕、其上裏足、耳表迄厚朴炭かくる也。

一、けづりはけづり舟入る、枕いる、重シ石裏払は、うらはらい舟いる也、炭磨は炭磨盥いる也。炭、磨石、とぎ屑入箱いる也。

一、削りは先、足のくるいを定ばんにて直し、足にやすりをかけ表にやすりをかけ、大ぜんにてよくこなし置き、定盤にかけかげをなをしてよし。

…以下略…

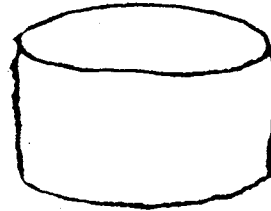
この史料によって、鏡製作の手順や必要な資材などの概略が判明する。今回出土した資料は大まかなところで共通する部分も認められる。材料としては銅ばかりではなく大量の土砂・水を必要とすることが判明した。道具類も専用のものから日常用いる様なものまで多岐に亘っている。ただし溶銅の湯口が柄の部分であると記されているが、筆者が観察したかぎりでは、その位置は異なっているのではないかと思われる。その他にも細かな点で少しずつ異なっているところがある。これらの違いについては、新たに考慮しなくてはならない問題となるであろう。

6. 伝世品・「坂東屋町」例との比較・検討

今回の資料は柄鏡そのものではなく、それを製作した鑄型による検討であるため、紋様その他については触れることは出来ない。そこで前田洋子氏の「柄鏡の変遷」、小林達雄氏監修の『柄鏡大鑑』をテキストとして、鏡の大きさや面径との比率といった要素から見た柄鏡の変遷を主題として取り扱うこととする。

日本において柄鏡が出現するのは、和鏡の形式的変遷から見て室町時代中期以降、ほとんど末

定ばん
の土
三二



「定盤は土を陰干しにして造った円柱状の丈短きもので、上は平面」と香取氏は説明している。

発掘調査でも出土している？粘土で作られており、径30cm、厚さ10cm程度の円盤状を呈している。

頃（概ね16世紀）のことである。この頃から絵画的背文が出現し、背地に粗地等の新手法が認められる。江戸時代までは、比較的直径が小さく、柄は細長くて鏡面より長い。柄鏡の形態的変遷は、柄鏡の総長における鏡面径の占める割合が一つの目安になり、時代が下がるにつれて割合は大きくなる。

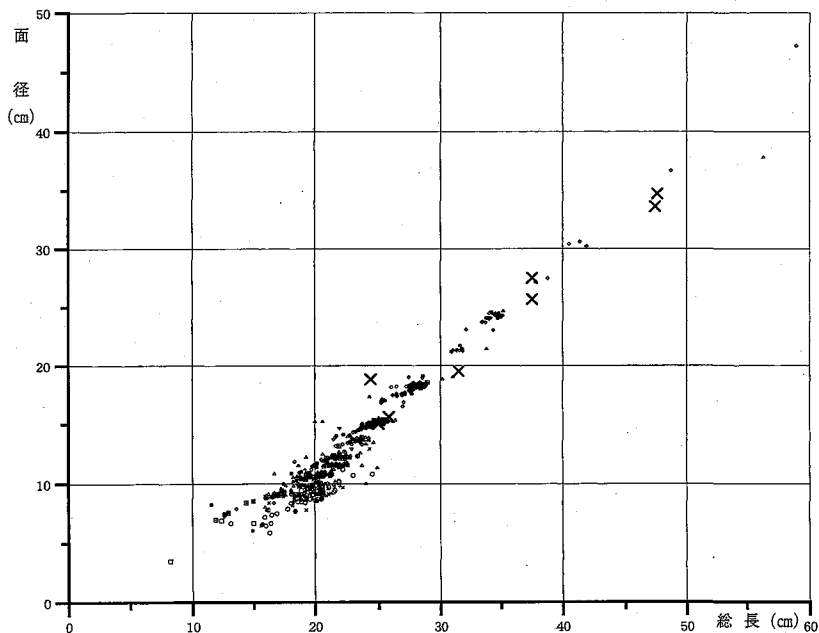


図9 柄鏡の比率グラフ(1)

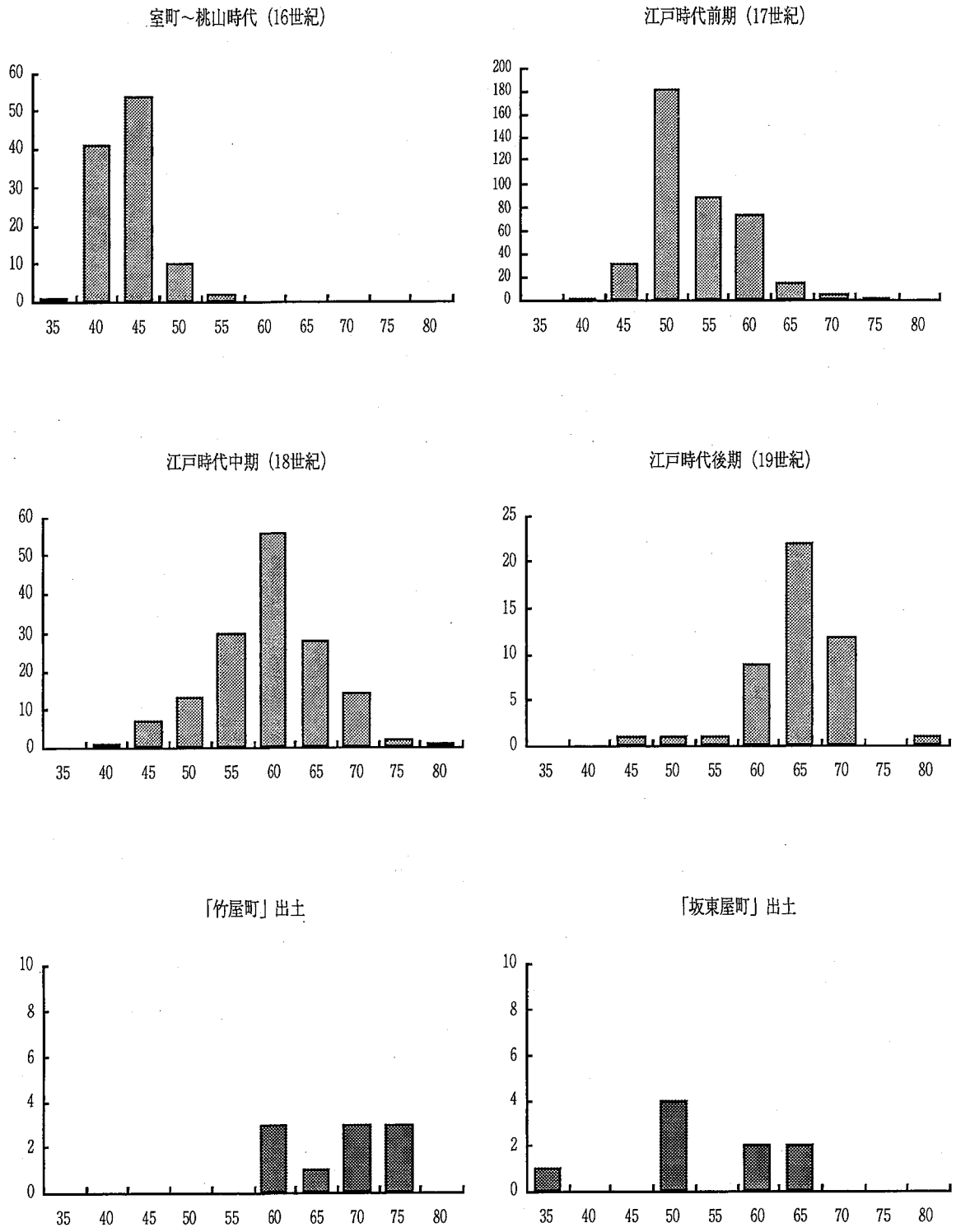
江戸時代前期（概ね17世紀）は、鏡面径が相対的に大きくなり、文様は鏡背面を一枚の画布と見做しているかのように花鳥・人物・樹木・山水・風景・家紋散らしなど絵画的意匠がのびのびとした表現で描き出されるようになる。

江戸時代中期（概ね17末～18世紀後半）は、6寸程度の中型が主流となる。そして髪形が大型化するにつれて、更に大きな鏡面径の鏡が要求されるようになり、それを支えるために柄は次第に太く短くなっていく。

江戸時代後期（概ね18世紀末以後）は、鏡の使用が更に広く一般にも普及するこの時期で、需要は増加の一方をたどる。量産体制に入るとともに、粗製乱造に拍車がかかった。踏み返しによる鑄鏡方法が考案され、安価であるが文様は不鮮明で金属質も悪い鏡が造られるようになった。鏡面径は一段と大きくなり、昔の鏡を複製したり大きな文字や家紋を入れただけで、全く創意工夫が見られなくなっていった。

以上が柄鏡のおおまかな変遷である。そして『柄鏡大鑑』（約650点）『日本の古鏡』（約180点）に示されている計測数値を基にグラフ化したのが図9である。資料には若干の重複があるが、全ての柄鏡の面径と総長の数値から作成したものである。この図では煩雑すぎて見づらい側面があるが、全体的な傾向としてはほぼ一直線に並んでおり、規格化されているように見受けられる。同じデータを柄鏡の面径と柄長の数値でグラフ化した時も、9、12...24cmと1寸きざみに企画したところに集中して分布していることが図9から読み取れる。

しかし仔細に見ると、鏡面の大きさや柄との比率などは時期毎に異なっていることも判明する。このことは和鏡の研究者の間では周知の事実として考えられているが、改めてヒストグラムとして作成したのが図10である。比率については、面径と柄長あるいは面径と総長どちらの比率を採用しても良いと思っている。しかし本例の場合、鏡面と柄部との境界を峻別することが困難な場合がある。そのため総長との比率で考えた方が良いと考え、こうした方式を採用することとした。



縦軸；点数
横軸；比率（%＝面径／総長）

図10 柄鏡の比率グラフ（2）

16～19世紀の伝世する柄鏡と、今回出土した鑄型とを比較するとかくの如くなる。このグラフは総長を100%としており、そのうち面径の占める割合を小さいものから大きいものへと5%刻みで並べたものである。したがって50%で面径と柄長は同じ大きさということになる。

16世紀では面径は2～3寸に収まっており、図14の極大値もその辺に位置している。そして面径の占める比率も45～50%で極大値を示し、平均値は46.11%となっている。

17世紀では面径は4寸で極大値を示しており、3～5寸のものが多くを占めている。50～55%で極大値を示し、平均値は55.77%でやや高くなってきている。

18世紀になると、更に大きい鏡が主流となり面径が5寸前後のものが最も多く、大きさもバラエティに富んでくる。また面径の総長に占める比率も、60～65%が最も大きく平均値は61.81%と更に高くなってきている。

そして19世紀になると、より分散化する傾向を示している。面径は5～6寸が最も多く、より大きくなってきていることが図9・10からも理解できるであろう。面径と総長との比率も65～70%が極大値で平均値は66.41%となっている。

以上のように伝世する柄鏡は、16世紀以後19世紀に至るまでは徐々に面径が大きくなり大型化してきている、と言われていることがグラフによっても確認できるようである。そして面径の総長に対する比率も大きくなってきていることが明かとなっている。

こうした美術史による編年によって、今回の出土品に検討を加えてみると以下の様になるであろう。

①鏡面の大きさについては、鏡鑄型の変色部分から推定される面径は5寸から1尺1寸を測り、7種の鑄型があり多様である。これは江戸時代でも中～後半の時期に位置づけられるのではないかと想定される。

②比率という点から見ると、鏡の総長が判明している鑄型（10点）の、総長に対する面径の比率傾向は60～80%に集中しており、その平均値も68.13%となっている。これは高い比率のところに位置していると言え、図10の時期毎のヒストグラムによれば、やはり江戸時代中期後半以後（18～19世紀）の要素が強いと想定される。

データが少ないということを考慮しなくてはならないのであるが、特に②や図10からは、18世紀段階のそれに近く、あるいは19世紀段階に該当するかも知れない傾向を示している。つまり面径の大きさの傾向や面径と柄長・総長との比較・比率から見ると、美術史による編年とは若干のズレが認められる。

しかも今回の出土例のなかに「菊田美作」銘の鑄型を確認したことは、時期決定に重要な要素として位置づけられる。すなわち現時点では面径と柄長の比率という側面からだけであるが、17世紀後半から18世紀初頭に製作した鏡の指標になり得ると考えてよい。今回出土した鑄造関連資料は、同時に出土した土器によってだけでなく文献史料によっても、18世紀前後のものであることが補強された。

「坂東屋町」例も鏡面や柄の部分が測定できない点を考慮すると、不確定要素が多分にある。

このような点を考えたうえで、報告者が推定するように、10～11cmの柄があったと仮定して作成したグラフが図10（1類は柄を持たない鏡であるという見解に基づいている）である。このグラフによって分布する位置が、「竹屋町」とは全く異なっていることが理解できるかと思う。このグラフは、17世紀段階に近い傾向を示している。つまり、ピークとなるところが両者で相当異なっており、先の美術史的編年の大きな流れに沿っているようである。ただし、もう少し細かな視点から検討すると、若干のズレが認められるようである。

③出土した鑄型を、「竹屋町」例と「坂東屋町」例を比較してみると次のようになるであろう。まず、今回紹介した鏡鑄型（「竹屋町」例）は胎土はかなり「ス」が入った状態が認められ、石化したスポンジのようである。「坂東屋町」例はそれに比べて、胎土の密度が高いと言える。しかも鏡背の紋様部分は完全に剥落しており、紋様の推定は不可能である。それに対して、「坂東屋町」例は一部紋様を推定することは可能であり、実見したところでは真土も若干厚く塗られているように見受けられた。真土の厚さも残存状況と関係があるのであろうか。

そして大型品の土型は本例に比べてかなり厚く造られている。これは大型鏡の製作にあたって土型をひたすら丈夫にする必要があり、資材をできるだけ少なくさせることが出来なかった。つまり鏡の製作法あるいは鑄造の技術が未だ完成の域に達していなかったため、と見るのが妥当ではなかろうか。

7. 課題と展望

「竹屋町」で出土した鏡鑄型は、土坑1151以外の遺構や遺物包含層からの出土分を合わせると膨大な量となる。まだ整理の途上にあるため、全体の数量などについては把握し切れていないのが現状である。そこで小稿では出土した鏡鑄型が、一つの遺構からのものでまとまっていたことと、時期が限定できるといった点から資料紹介を主眼として報告したものである。今回の報告の一応のまとめとしては、各時期の資料の出土によって、面径と総長もしくは柄長との比率を基準として、その時期が推定出来るようになるのではないかと考えている。

そして整理の過程で気がついたことや、課題とすべきことを思いつくままながらも、いくつか挙げて結びとしたい。

①柄鏡が大型化してきたのは何故であるのか…髪形が大型化してきたことに対応していったと言われているが、ほかに理由はないものか。たとえば、消費経済社会が肥大化してきた当時の社会体制との関係も見逃せないのではないだろうか。

②鏡生産体制の単位が推定できるか…『覚書』に拠れば、鑄型製作に必要な素材は、京都市内の各所から調達しており、分業体制が成立していた様子がうかがえる。「菊田美作」銘の鑄型も他の場所（たとえば、新町二条上ル）で作られ、そこから土型が移動していたと想定することも可能であろう。

③ヘラ書き文字の「菊田美作」「美作」が同一名を指すと考えた場合、相当異なった書体の文字であるため、別人が書いたものと推察される。その場合、菊田美作というのは固有名詞そのも

のを指すのではなく、菊田美作を代表とする工房のような組織があったのではないかと考えることも可能ではないだろうか。

④紋様から見た偏年観の再検討が迫られるのではないか。出土品と美術史的観点とは若干ズレが生じているのは先に指摘したところである。「菊田美作」銘の鑄型の存在は出土品の時期比定を補強している。

⑤鑄型の厚さが違うのは、技術的な優劣に拠るものと理解される。現時点ではこのような予測を立てているだけだが、異なる時期毎のデータが多く収集されればより明かとなるであろう。

⑥鳥目の位置は必ずしも鏡面の中心位置と対応していないことが判明した。この点について、土型製作のための中心ポイントではないかという意見がある。各時期のものやより多くの類例を求める必要があるが、傾聴すべき意見である。

⑦胎土分析が可能か…先に報告したように鑄型の胎土は非常に朔い。そのため、胎土分析が可能かどうかは疑問があるところだが、どこから採取した土か或いは鑄型の製作地が特定できるのではないか？また真土の産地も特定できるのかどうか。『覚書』との比較検討も出来るのではないだろうか。

⑧銅の成分分析で銅の生産地の特定が可能になり、流通の経路が分かる？あるいは時期決定の要素となりうるか。

①②③は文献史学（近世）、④は美術史学、⑤は冶金工学、⑦⑧は化学的分析を必要とするもので、よく言われているように学際的な協力の必要性を痛感するものである。

最後に、柄鏡製作に当たって馬蹄形の土型を造るのは理解できる。しかし円形の鏡を製作するに当たっては、台形の部分は不必要ではないだろうか。方形の鏡の場合でも同じように馬蹄形であり、何故斯様な形にする必要があるのか、という素朴な疑問がある。

なお末筆であるが、次の方々から多大なる協力と御教示を得ました。記して感謝いたします。出水みゆき、植山茂、貝英幸、久保智康、下坂守、能芝妙子、藤本孝一、前田洋子、モンペティ 恭代

参考文献

- (1) 孤松子撰『京羽二重』巻6 貞亨2年(1685)
- (2) 香取秀真「御鏡仕用之控書 註記」『考古学雑誌』第30巻1号 1940年
- (3) 前田洋子「柄鏡の変遷—古家コレクション及び大阪市立博物館所蔵資料を中心にして—」『研究紀要』第9号 大阪市立博物館 1977年
- (4) 前田洋子「柄鏡の変遷(その2)—近世大阪の鏡師銘を鑄出した柄鏡を中心として—」『研究紀要』第17号 大阪市立博物館 1985年
- (5) 前田洋子編『日本の古鏡—女装美のプロデューサー—』大阪市立博物館第100回特別展図録 大阪市立博物館 1985年
- (6) 植山茂編『平安京左京四条四坊四町』京都文化博物館研究報告 第9集 京都文化博物館 1993年
- (7) 小林達雄監修『柄鏡大鑑』ジャパン通信社 1994年

- (8) 吉崎伸「平安京左京二条四坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- (9) 久世康博・堀内明博「生産遺跡一京・鑄物工房」『季刊 考古学』第53号 雄山閣 1995年
- (10) 久保智康「京都の鑄鏡師」京都国立博物館土曜講座資料 1996年2月
- (11) 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義弘「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

